

日本におけるアルトゥール・シュニッツラー

(上演記録についての補遺)

小泉 淳二

以下は、『日本におけるアルトゥール・シュニッツラー～翻訳・研究・上演～』（井上修一/森正史/小泉淳二）（日本独文学会編集・発行《ドイツ文学》90号、1993年3月、173-218頁）に収められた上演記録（III 上演・上映・放送、同214-217頁）についての補遺、補足である。

本文には、同上演記録の該当箇所を、整理番号はじめ、すべてそのまま転記した上で註番号（場合によってはルビ）を付した。そして、それら上演記録の典拠、補足事項を、煩瑣をいわず脚註に記載した。漢数字はアラビア数字に、旧字体は新字体に、適宜おきかえてある。

*

III-1 Anatol (1888-1891)

1. 新劇場：〔アナトール他〕〔1916. 12 京橋鴻の巣4階 アナトール/ぢごくと兵隊/小間使と若旦那 秦豊吉訳〕¹

Die Frage an das Schicksal

4. 舞台協会： 運命の質問 〔1924. 5 牛込会館 秦豊吉訳〕²

Weihnachtseinkäufe

5. 村田実一座〔とりで社〕： クリスマスの買入 〔1914. 3[?] 下渋谷福沢桃介邸内美術劇場試演場 村田実演出〕³

¹ [新劇場のメンバーらによる上演] 大正5/1916年12月25日（京橋鴻の巣4階）：『ぢごくと兵隊』〔輪舞の中一幕 秦豊吉訳』『小間使と若旦那』〔同』『アナトール』〔①田中栄三『明治大正新劇史資料』演劇出版社、1964年、158頁。②松本克平『日本新劇史～新劇貧乏物語～』筑摩書房、1966年、522頁。〔田中によると、新劇場による全4回の公演・試演とは別個の上演。松本が引用している関口存男日記（大正5年12月25日）によると、「クリスマスの余興でやる劇」であり、『アナトール』を含め、演目はすべて「一幕物」であったとのこと〕]

² 舞台協会第21回公演 大正13/1924年5月11～18日 午後6時開演（牛込会館）：『運命の質問』アナトールの中一幕 秦豊吉訳〔田中『明治大正新劇史資料』135頁〕

³ 村田実一座（とりで社）非公演 大正3/1914年3月8日[?](下渋谷福沢桃介邸内美術劇場試演場)：『クリスマスの買入』〔座長：村田実〕〔《時事新報》1914年3月8日〕

6. 京都芸術座〔エラン・ヴィタール小劇場〕： クリスマス・シュニッツラーの夕〔1926. 12 京都帝国大学楽友会館 道づれ/アナトール・クリスマスの買物/臨終の仮面/アナトール・結婚式の朝 野淵昶演出〕⁴

Episode

7. 新劇場： シュニッツレル・アアベント〔1916. 9 丸の内保険協会講堂 小間使と若旦那 秦豊吉訳/猛者 森鷗外訳/挿話 秦豊吉訳；小山内薫演劇監督〕⁵
8. 青騎士小劇場： 挿話〔1921. 11 京橋相互館ホール 秦豊吉訳〕⁶

Denksteine

9. 新劇場： 記念の宝石〔1917. 2 京橋鴻の巣4階 秦豊吉訳〕⁷

Abschiedssouper

10. 芸術協会： 別れの晩餐〔1924. 1 大江ビルホール 楠山正雄訳、坪内士行演出〕⁸
11. 芸術協会： 別れの晩餐〔1924. 5 帝国ホテル演芸場 楠山正雄訳、坪内士行演出〕⁹

Anatols Hochzeitsmorgen

13. エラン・ヴィタール小劇場： 結婚式の朝〔1927. 2 YMCA〕¹⁰

⁴ 京都芸術座（エラン・ヴィタール小劇場）クリスマス・シュニッツラーの夕大正15/1926年12月19日（京都帝国大学楽友会館）：『道づれ』『アナトール・クリスマスの買物』『臨終の仮面』『アナトール・結婚式の朝』野淵昶演出〔①大岡欽治『関西新劇史』東方出版、1991年、47頁。②松本『日本新劇史』629-630頁〕

⁵ 新劇場第3回試演 シュニッツレル・アアベント 大正5/1916年9月28~29日（丸の内保険協会講堂）：1.『小間使と若旦那』ライゲン輪舞の中一幕 秦豊吉訳 小山内薫舞台監督〔3.と5.も同様〕2.講演「アルツウル・シュニッツレルに就いて」小山内薫 3.『猛者』一幕 森鷗外訳 5.『挿話』アナトールの中の「エピソード」一幕 秦豊吉訳〔①田中『明治大正新劇史資料』157-158頁「若旦那と小間使」は、会員組織のため上演禁止にならなかったが、あとで私〔＝田中栄三〕は丸の内署に呼ばれて注意を受けた。それにもこりず、その年の暮のクリスマスの晩に、鴻の巣の4階で、『輪舞』の中の「ちごくと兵隊」を荘司亘の兵隊、宮部静子のちごくで上演した。シュニッツレルの問題作『ライゲン』が、日本の舞台に上演されたのは、この2種だけであった。②秋庭太郎『日本新劇史（下巻）』理想社、1956年、324頁「若旦那と小間使」〔…〕が好評で、この試演は2日間とも満員の盛況であった。③田中栄三『新劇その昔』文芸春秋新社、1957年、213-217頁〕

⁶ 青騎士小劇場第3回試演 大正10/1921年11月（京橋相互館ホール）：『挿話』アナトールの内一幕 秦豊吉訳〔田中『明治大正新劇史資料』193頁〕

⁷ 新劇場第4回試演 大正6/1917年2月3~5日 午後5時開演（京橋鴻の巣4階）：『記念の宝石』アナトールの中一幕 秦豊吉訳〔田中『明治大正新劇史資料』157頁〕

⁸ 芸術協会〔試演〕大正13/1924年1月（大江ビルホール）：『別れの晩餐』アナトールの中一幕 楠山正雄訳 坪内士行演出〔大岡『関西新劇史』39頁〕

⁹ 芸術協会第1回公演 大正13/1924年5月11~15日 午後6時開演（帝国ホテル演芸場）：『別れの晩餐』アナトールの中一幕 楠山正雄訳 坪内士行演出〔①田中『明治大正新劇史資料』207頁。②大岡『関西新劇史』40頁〕

14. エラン・ヴィタル小劇場： 結婚式の朝 [1928. 2 先斗町歌舞練場] ¹¹
15. エラン・ヴィタル小劇場： 結婚式の朝 [1928. 3 大阪朝日会館] ¹²
16. エラン・ヴィタル小劇場： アナトールの結婚式の朝 [1930. 9 京都市公会堂] ¹³

III-2 Liebele (1894)

1. 黒猫座： 恋愛三昧 (初演) [1914. 3 有楽座 森鷗外^{ナオシ}訳、林和舞台監督] ¹⁴
2. 村田実一座 [とりで社]： 恋愛三昧 [1915. 5 神田三崎座 村田実演出] ¹⁵
3. 新時代劇協会 (第3次)： 恋愛三昧 [1915. 6 神田三崎座 森鷗外訳] ¹⁶
4. 築地小劇場： 恋愛三昧 [1924. 11 築地小劇場 森鷗外訳、青山杉作演出] ¹⁷
5. 築地小劇場： 恋愛三昧 [1925. 11 築地小劇場 森鷗外訳、青山杉作演出] ¹⁸
6. 劇団辻舞台： 恋愛三昧 [1933. 10 蚕糸会館] ¹⁹

-
- ¹⁰ エラン・ヴィタル小劇場 昭和2/1927年2月17日 (YMCA):『結婚式の朝』〔松本『日本新劇史』630頁〕
 - ¹¹ エラン・ヴィタル小劇場 昭和3/1928年2月5日 (先斗町歌舞練場):『結婚式の朝』〔松本『日本新劇史』631頁 [予告した『検察官』が上演禁止となり、急遽演目を変更したとのこと]〕
 - ¹² エラン・ヴィタル小劇場 昭和3/1928年3月 (大阪朝日会館):『結婚式の朝』〔松本『日本新劇史』631頁〕
 - ¹³ エラン・ヴィタル小劇場 昭和5/1930年9月23日 (京都市公会堂):『アナトールの結婚式の朝』〔松本『日本新劇史』635頁〕
 - ¹⁴ 黒猫座第1回公演 大正3/1914年3月1~5日 午後6時開演 (有楽座):『恋愛三昧』三幕 森鷗外訳 (初演) 林和舞台監督〔①田中『明治大正新劇史資料』113頁。②《生活と芸術》1914年3月、広告頁。③小沢愛囀「恋愛三昧を見て」、《三田文学》1914年4月、173-174頁。④名倉生「有楽座恋愛三昧」、《東京朝日新聞》1914年3月3日。⑤[無署名]「黒猫座旗揚げ劇」、《東京朝日新聞》1914年3月2日。⑥佐木生「黒猫座の初興行」〔舞台稽古評〕、《万朝報》1914年3月1日。⑦中村吉三「狂言座と黒猫座」、《演芸画報》1914年4月、129-134頁。⑧〇〇「黒猫座の嚆矢小町」、《中外商業新報》、1914年3月2日。⑨桃生「黒猫座の公演を観る」〔舞台稽古評〕、《東京日日新聞》1914年3月1日。⑩久米正雄「三月の劇壇」、《帝国文学》1914年4月、107-113頁。⑪秦豊吉「黒猫座の『恋愛三昧』を観る」、《我等》1914年5月、99-108頁〕
 - ¹⁵ 村田実一座 (とりで社) 第4回試演 大正4/1915年5月28日 (神田三崎座):『恋愛三昧』村田実演出〔①松本『日本新劇史』466頁。②大笹吉雄『日本現代演劇史 ～明治・大正篇～』白水社、1985年、316頁。③久松潜一編『新版日本文学史6 ～近代 I ～』至文堂、1971年、506頁〕
 - ¹⁶ 新時代劇協会定期公演 大正4/1915年6月23~27日 (神田三崎座):『恋愛三昧』森鷗外訳〔①田中『明治大正新劇史資料』144-145頁。②早稲田文学記者「大正四年文芸界資料」、《早稲田文学》1916年2月、15頁。③《東京朝日新聞》1915年6月22日 [配役決定の報]。④《東京朝日新聞》1915年6月15日 [『ソルネス』から『リーベライ』に演目が変更になったとの報]。⑤横川唯治「六月の新劇 (無名会—文芸座—新時代劇協会)」、《演芸画報》1915年8月、170-176頁〕

III-3 Reigen (1896-1897)

1. NLT: 輪舞 [1983. 6 銀座みゆき館劇場 津浦秀爾訳, 中村哮夫演出] ²⁰
2. グループ・ザット: 恋愛まがい物語—そして…何もなかった [1986. 5 大阪島之内劇場 竹内一秀訳・脚色・演出] ²¹
3. 銀座セゾン劇場: 輪舞 [1987. 7~8 銀座セゾン劇場 高橋健二訳, 木村光一脚本・演出, 宮永雄平舞台監督] ²²

III-5 Der grüne Kakadu (1898)

1. 築地小劇場: 緑の鸚鵡 (初演) [1927. 10 帝国劇場 北村喜八訳・演出, 水品春樹舞台監督] ²³
2. 東演: 緑のおうむ [1968. 11 日経ホール 秦豊吉訳, 下村正夫演出] ²⁴

-
- 17 築地小劇場第15回公演 大正13/1924年11月1~10日 毎夕午後6時開演 (築地小劇場): 『恋愛三昧』三幕 森鷗外訳 青山杉作演出 [①田中『明治大正新劇史資料』210頁。②大笹吉雄『日本現代演劇史 ~大正・昭和初期篇~』白水社、1986年、459-460頁 [「当時はフェンシングや決闘の儀式を知っている邦人はほとんどなく、調べた挙句にフランス大使館付武官に教えてもらおうということになった。[…] フェンシングの稽古は4日間だったが、俳優だけに大変器用で覚えがよいと武官は折紙をつけて帰った。が、中間演劇的な『恋愛三昧』は、知識層に好評というわけにはいかなかった。]。③倉林誠一郎『新劇年代記 ~戦前篇~』白水社、1972年、35-36頁。④浅野時一郎『私の築地小劇場』秀英出版、1970年、90-91頁。⑤半田康『「恋愛三昧」評 (特に演出者青山氏に)』、『築地小劇場』1924年12月、62-65頁。⑥高田保「二つの非劇評」、《演劇新潮》1924年12月、68-73頁。⑦谷村小五郎『「恋愛三昧」閑話偶感』、『築地小劇場』1925年1月、89-91頁]
 - 18 築地小劇場第3回昼公演 大正14/1925年11月8, 14~15, 21~22, 28~29日 毎昼午後1時半開演 (築地小劇場): 『恋愛三昧』(リイペライ) 三幕 (再演) 森鷗外訳 青山杉作演出 [田中『明治大正新劇史資料』217頁]
 - 19 劇団辻舞台第12回公演 昭和8/1933年10月21日 (蚕糸会館): 『恋愛三昧』 [《芸術殿》1934年1月、69頁]
 - 20 NLT 昭和58/1983年6月12~30日 (銀座みゆき館劇場): 『輪舞』津浦秀爾訳 中村哮夫演出 [①《演劇年報》1984年、55頁。②《悲劇喜劇》1983年7月、60頁]
 - 21 グループ・ザット 春の演劇まつり 昭和61/1986年5月1日 (大阪島之内小劇場): 『恋愛まがい物語—そして…何もなかった』竹内一秀訳・脚色・演出 [《演劇年報》1987年、92頁]
 - 22 銀座セゾン劇場 昭和62/1987年7月11日~8月9日 (銀座セゾン劇場): 『輪舞』高橋健二訳 木村光一脚本・演出 [①《演劇年報》1988年、163頁。②渡辺保「民芸の『ヴィシーでの出来事』」[劇評を含む]、『新劇』1987年9月、30-35頁]
 - 23 築地小劇場第2回帝劇公演 昭和2/1927年10月26~30日 (帝国劇場): 『緑の鸚鵡』一幕 (初演) 北村喜八訳・演出 水品春樹舞台監督 [①田中『明治大正新劇史資料』233頁。②倉林『新劇年代記』190-191頁 [《やまと新聞》掲載の柳葉「築地小劇場」を再々録]。③浅野『私の築地小劇場』233-234頁。④浜村米蔵「築地小劇場を見る」、《演芸画報》1927年12月、40-41頁]

III-6 Der Schleier der Beatrice (1899)

1. 無名会：ベアトリイチェ^{ママ}の面紗〔四幕〕〔1914.5 有楽座 楠山正雄訳、池田大伍舞台監督〕²⁵

III-7 Der blinde Geronimo und sein Bruder (1900)

1. 東京劇場：盲目の弟〔1930.5 東京劇場 山本有三翻案〕²⁶
2. 関西大学劇研究会：盲目のジェロニーモと其の兄〔1933.12 大阪日簡ビル小ホール 文芸部訳・脚色、大瀬滝夫演出〕²⁷

III-8 Lebendige Stunden (1900-1901)

Lebendige Stunden

1. 東京商科大学一橋会：リビング・アワーズ（生命ある間）〔英語劇〕〔1927.5 一橋Aホール〕²⁸

Die letzten Masken

2. 美術座〔エラン・ヴィタール小劇場〕：臨終の仮面〔1923.12 京都市公会堂 野淵

²⁴ 東演 昭和43/1968年11月20~22, 25~27日（日経ホール）：『緑のおうむ』秦豊吉訳 下村正夫演出〔①《演劇年報》1969年、43頁。②《新劇》1969年1月、154頁〕

²⁵ 無名会第3回公演 大正3/1914年5月4~10日 午後5時開演（有楽座）：『ベアトリイチェ^{ママ}の面紗』四幕 楠山正雄訳 池田大伍舞台監督〔①田中『明治大正新劇史資料』136-137頁。②蝶二「有楽座の無名会」、《万朝報》1914年5月6日。③楠山正雄「伊庭君に与へて僕の近状を嘲る書」〔翻訳の乱暴と解釈の不徹底を自省〕、《生活と芸術》1914年6月、26-31頁。④〔無署名〕「有楽座無名会」、《東京朝日新聞》1914年5月6日。⑤岡本一平「無名会の背景」、《東京朝日新聞》1914年5月10日。⑥黒念坊「無名会劇」、《仮面》1914年6月、122-123頁。⑦山本有三「美術劇場と無名会」、《新思潮》1914年6月、86-94頁。⑧〔本間〕久雄「最近新劇団の一瞥」、《早稲田文学》1914年6月、70-71頁。⑨桃「有楽座の無名会」、《東京日日新聞》1914年5月6日。⑩青峰「無名会を観て」、《国民新聞》1914年5月12日。⑪里愁「無名会を観て」、《二六新報》1914年5月8日。⑫飛入「有楽座の無名会」、《中外商業新報》1914年5月6日。⑬本間久雄「無名会と美術劇場」、《演芸画報》1914年6月、104-109頁。⑭〔無署名〕「無名会」、《国民新聞》1914年5月7日。⑮一記者「無名会」、《報知新聞》1914年5月6日〕

²⁶ 東京劇場五月狂言 昭和5/1930年5月1日（初日）（東京劇場）：山本有三作『盲目の弟』〔『盲目のジェロニーモと其の兄』の翻案〕〔根本伊代吉「山本有三作『盲目の弟』東京劇場五月狂言（芝居見たまま）」、《演芸画報》1930年6月、82-88頁〕

²⁷ 関西大学劇研究会第1回研究発表会 昭和8/1933年12月16日（大阪・日簡ビル〔小〕ホール）：『盲目のジェロニーモと其の兄』文芸部訳・脚色 大瀬滝夫演出〔大岡『関西新劇史』457, 459頁〔大瀬滝夫はステージネーム、本名は田中友幸、東宝映画社長（1975-81）〕〕

²⁸ 東京商科大学一橋会第7回英語大会 昭和2/1927年5月20~22日（一橋Aホール）：『リビング・アワーズ（生命ある間）』〔英語劇〕〔①《一橋新聞》第51号、1927年5月16日〔予告記事および梗概〕。②《一橋新聞》第52号、1927年6月6日〔「漏刻の砂」欄に評一言あり。「英語会のメイキアッパにどこやらがあわてた。白粉の厚さになぜ調査会をつくらなかった」〕〕

昶舞台監督〕²⁹

3. 東京商科大学一橋会：ラスト・マスク（最後の仮面）〔英語劇〕〔1924. 11 東京商科大学構内バラックA教室〕³⁰
5. 東京商科大学一橋会国際部：最後の仮面〔英語放送劇〕〔1927. 10 JOAK 東京中央放送局〕³¹
6. エラン・ヴィタル劇団：臨終の仮面〔1935 京都帝国大学楽友会館(?)〕³²
7. テアトロ・デザール：臨終の仮面〔1946. 7 池袋テアトル・デザール^{ママ} 野尻徹演出〕³³
8. 東京高校：最後の仮面〔関東高校演劇連盟第1回コンクール〕〔1948. 5 都立高校講堂 岩淵達治, 安村美博演出〕³⁴

III-9 Marionetten (1901-1904)

Der Puppenspieler

1. 研究座：傀儡師〔1921. 9 有楽座 林久男訳, 邦枝完二舞台監督〕³⁵

Der tapfere Cassian

2. 土曜劇場：猛者〔1912. 4~5 有楽座 森鷗外訳, 小山内薫舞台監督〕³⁶

²⁹ 美術座（エラン・ヴィタル小劇場）研究劇 大正12/1923年12月（京都市公会堂）：『臨終の仮面』野淵昶舞台監督〔大岡『関西新劇史』39頁〕

³⁰ 東京商科大学一橋会第4回英語大会所演 大正13/1924年11月21~23日（同大学構内バラックA教室）：『ラスト・マスク（最後の仮面）』〔英語劇〕〔①《一橋新聞》第8号、1924年11月1日〔予告記事〕。②《一橋新聞》第9号、同年11月15日〔予告記事および梗概〕。③《一橋新聞》第10号、同年12月1日〔評一言、報告記事、劇評（千文公「一橋会第4回英語大会所演『忘れて来た絹帽』と『最後の仮面』につきて）を含む〕

³¹ 東京商科大学一橋会国際部英語放送劇 昭和2/1927年10月22日〔午後6時半より放送（JOAK東京中央放送局）：『最後の仮面』〔①《一橋新聞》、1927年10月17日〔予告記事〕。②《一橋新聞》、1927年11月7日〔記事および「漏刻の砂」欄に評あり〕

³² エラン・ヴィタル劇壇 昭和10/1935年~昭和12/1937年（京都帝国大学楽友会館(?)）：『臨終の仮面』〔松本『日本新劇史』644-646頁〕

³³ テアトロ・デザール第1回発表会 昭和21/1946年7月27~28日（池袋の同劇団スタジオ）：『臨終の仮面』〔《日本演劇》1946年9月、24頁〔「池袋に小さなスタジオを持つて演劇を研究、実演を行ふグループが出来た。テアトロ・デザールといひ、毎月2回発行会を行ふ。会費は6円。第1回発表会は7月27、28両日『熊』（チエホフ）『臨終の仮面』（シュニツラー）を演じた」〕〕

³⁴ 東京高校（関東高校演劇連盟第1回コンクール）昭和23/1948年5月29~30日（都立高校講堂）：『最後の仮面』〔①《演劇界》1948年6月、40頁〔午後1時より都立高校講堂で開催。参加高と作品は都立高校（オニール作『鯨』）学習院（ゴルスワージイ作『兄と弟』）東京高校（シュニツラア作『最後の仮面』）〕。②《日本演劇》1948年7月〕

³⁵ 研究座第5回公演 大正10/1921年9月11~14日（有楽座）：『傀儡師』一幕 林久男訳 邦枝完二舞台監督〔田中『明治大正新劇史資料』71, 190頁〕

4. 吾葉会： 猛者 [1919. 11 本郷迫分東京帝国大学学生基督教青年会館講堂 森鷗外訳、田中栄三指導]³⁷
5. エラン・ヴィタル小劇場： 猛者 [1920. 5 京都市公会堂]³⁸
6. 東京有楽座近代劇松島千鳥一座： 猛者 [1920. 9~11 地方巡回公演； 上田末広座から長野千歳座，高田大漁座，新潟改良座，沼垂沼垂座，富山第三福助座，福井加賀屋座，敦賀小桜座を経て岐阜に至る]³⁹
7. [舞踊家山田五郎渡米送別会]： 猛者カシヤン [人形を使った仮面劇] [1926. 3 丸の内保険協会講堂 森鷗外訳，千田是也，伊藤熹朔脚色・演出]⁴⁰

＊

翻訳文献や研究文献であれば、どこかに印刷物として今も存在し、なんらかの方法で実物を確かめることができるだろう。上演記録となると、なかなかそうはいかない場合が少なくない。20年も前に作成した書誌になにを今さら、というためらいは今も心の底にわだかまっている。しかし、この種の記録の場合、作成に際して根拠にしたものは、やはりどこかに明示しておくべきではなかろうか。

自分の目で観たわけではない。プログラムやパンフレット、チラシで確かめたわけでもない。それなりの厚さと重さを持ち、この世のどこかに物として保存されている研究・翻訳文

-
- ³⁶ 土曜劇場第2回公演 明治45/1912年4月6, 13, 20, 27日 (有楽座)：『猛者』一幕 森鷗外訳 小山内薫舞台監督 [①田中『明治大正新劇史資料』12, 103頁。②秋庭太郎『東都明治演劇史』鳳出版、1975年、599頁。③時評記者「最近文壇 (三月中旬より四月中旬まで) の記録」[劇の評を含む]、《文章世界》1912年6月、78-87頁。④石橋思案「本町誌」[劇の評を含む]、《文芸倶楽部》1912年5月、265-267頁。⑤芹影女「第二回土曜劇場」、《歌舞伎》1912年5月、103-105頁]。土曜劇場第3回公演 明治45/1912年5月4, 11, 18, 25日 (有楽座)：『猛者』一幕 森鷗外訳 小山内薫舞台監督 [⑥田中『明治大正新劇史資料』104頁 [好評のため前月に引続き上演]。⑦秋庭『東都明治演劇史』599頁。⑧国枝史郎「土曜劇場印象記」、《劇と詩》1912年6月、105-108頁]
- ³⁷ 吾葉会第1回私演 大正8/1919年11月20日 午後5時半開演 (本郷迫分東京帝国大学学生基督教青年会館講堂)：『猛者』一幕 森鷗外訳 田中栄三指導 [①田中『明治大正新劇史資料』187頁 [「女優がいないので […] 加藤精一君の許でセリフの勉強をしていた岡田嘉子連れて来て、「猛者」の少女ゾフィイを演らせた。まだ全然素人だったが、なかなか巧かった。この時が岡田嘉子の初舞台になるわけである」]]
- ³⁸ エラン・ヴィタル小劇場 大正9/1920年5月 (京都市公会堂)：『猛者』 [①大岡『関西新劇史』30頁。②松本『日本新劇史』625頁]
- ³⁹ 東京有楽座近代劇松島千鳥一座 大正9/1920年9~11月 (上田末広座から長野千歳座，高田大漁座，新潟改良座，沼垂沼垂座，富山第三福助座，福井加賀屋座，敦賀小桜座を経て岐阜に至る地方巡回公演)：『猛者』 [①田中『新劇その昔』164頁]

献とはちがった、いわば、できごとでしかないような事柄の記録には、やはり典拠を明示しておくことこそが、ぜひとも必要だ、と考えた次第である。

脚注の記載にあたっては、可能なかぎり典拠を再確認した。とはいえ、誤記、勘ちがい、遺漏その他は多々あろう。大方のご指摘、ご教示をいただくことができるなら、それ以上にありがたいことはない。

(平成24/2012年10月26日)

40 [舞踊家山田五郎渡米送別会での上演] 大正15/1926年3月(丸の内保険協会講堂):『猛者カシヤン』[仮面劇] 森鷗外訳 [千田是也・伊藤熹朔脚色・演出] 〔①大笹『日本現代演劇史～大正・昭和初期篇～』525頁 [「小山内が仮面劇を手がけたのは、築地を去った千田是也が3月に舞踊家山田五郎の渡米送別会に丸の内の保険協会ホールで伊藤熹朔、音楽家の小代良夫らとシュニッツラーの『猛者カシヤン』を仮面劇に仕立てて上演、それを見て刺激を受けたことからだった」]。②伊藤熹朔『舞台装置の三十年』筑摩書房、1955年、33-34頁 [「小山内薫先生の生きていられる頃、2つの仮面劇をした。シュニッツラー作『猛者』は千田是也と共にやり、メイテルリンク作『砂時計』は小山内先生の演出であった。いずれも私の20代の時である。[…]'『猛者』の主役カシヤンの仮面は、伎楽の仮面のように大きく頭にのせてかぶるように出来、顎はぶらさがっていた。それがゆれると口を動かして話をしているように見えた」。築地小劇場最初の仮面劇『砂時計』(大正15/1926年4月24日初日)の作者は「メイテルリンク」ではなく、「ウイリアム・バトラア・イエエツ」]。③千田是也『もうひとつの新劇史～千田是也自伝～』筑摩書房、1975年、115頁 [「たしか2月だったと覚えている」とのこと]。④小山内薫『演出者の手記』洸林堂書店、1941年、10-16頁 [『小山内薫全集6』臨川書店、1975年、388-393頁]]